

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

2.6 北西海岸先住民の木箱づくり, コメント

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-01-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山田, 幸生, 木村, 慶太, 岸上, 伸啓 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00008312

2.6 北西海岸先住民の木箱づくり

山田 幸生・木村 慶太

(関西大学初等部, 立命館宇治高等学校)

要旨: 世界には、数多くのすばらしい芸術作品がある。なかでも、世界文化遺産としても名高いトーテムポールを含むカナダ北西海岸先住民のアートは単なる芸術作品としてではなく、生活文化そのものが表現されている。本ワークショップでは、国立民族学博物館（以下、みんなくと記す）の岸上伸啓の講演に続いて、収蔵物を参考として開発したものづくり教材を小学校図画工作科と中学校美術科・技術科において授業実践した内容を報告した。その後、参加者は、現地の材料を使った「食料箱」のミニチュアモデルの体験製作を行い、感想を出し合うことで学びを深め合った。

キーワード: カナダ北西海岸先住民のアート, トーテムシンボル, モチーフ, ものづくり

1 はじめに — 本ワークショップの目的

昨今のグローバル化に伴い、国際理解教育を可能とする世界観のある教材を具体化する必要性は高まってきている。そこで、見る人に大きな印象を与えるトーテムポールに着目し、それを製作するカナダ北西海岸先住民の芸術性・生活観にふれることができるものづくり教材の一例を参加者に提示することを目的として当ワークショップを進めた。ものづくりは児童・生徒が楽しみにしている分野でもあり、興味や関心を高め、理解を深めるためにはより具体的な手法であるといえる。また、児童・生徒の発達段階を考慮した時に、座学で進める学習形態と比較しても、より高い学習効果が得られると予想される。本ワークショップにて、カナダ北西海岸先住民の芸術にふれ、参加者自身が実際にものづくりを体験するなかで、異文化を理解する上でのものづくり教材の在り方を参加者とともに検証した。

2 本題材を選んだ理由

(1) 図画工作科・美術科・技術科の視点から

カナダ北西海岸先住民は、豊富な森林資源を利用した芸術性の高い木の文化を確立した。彼らは自分たちの願いや祈りを生き物を紋章化したトーテムシンボルに込める。トーテムシンボルを一本の木に彫刻して表現したトーテムポールは世界的に知られるが、彼らが祭祀具や身の周りの生活用品にまでトーテムシンボルを描き、日常生活と密接に関連していることはあまり知られていない。

トーテムシンボルには、彼らを取り巻く自然界が表現され、トーテムシンボルを鑑賞しているとカナダ北西海岸の環境の様子や自然観を学び取ることができる。例えば、太

陽や月といった自然物を崇拜していること、そして、サーモン・シャチ・クジラ・ラッコ・カニ・タコなどの海の生き物やクマ・オオカミなどの動物、また、ハチドリ・イーグル・ワタリガラスなどの鳥類、さらに、チョウ・トンボなどの昆虫とシンボルの対象になっている生き物を通して、彼らが温暖で豊かな自然環境のもとで過ごしていることがうかがい知れる。また、児童・生徒にとって、親しみやすい生き物がモチーフとなっていて、自然と興味・関心が湧いてくると考えられる（写真1）。



写真1 トーテムシンボルが描かれた作品（サーモン）

また、トーテムシンボルは、デザイン化されているため描きやすいとも言える。とくに、平面作品は模倣しやすく、そこからの創作も容易であり、児童・生徒が模倣・創作する時の参考作品としての有効性の高さがうかがえる。

(2) 国際理解教育の視点から

カナダ北西海岸先住民は、豊かな森林資源を利用した生活文化を形成してきた。彼らは、木を彫り、木に描いて、自分たちの自然や先祖に対する敬虔な態度を表現する。トーテムポールもそのひとつであり、単なる芸術品ではなく人々の願いや祈りが込められている。そのような現地の人々の思いを感じ取ることで国際理解教育が可能となり、自分たちとの共通性と差異性を見出すなかで価値観の違いを認め、尊重する精神を養う。カナダ北西海岸先住民の芸術や生活文化は、そのための教材としての可能性を秘めている。それは、彼らが人種として日本人と同じモンゴリアンであることや森林資源を活用した生活文化を形成していること、さらに、先祖とのつながりや自然を大切にす精神文化を有することについても共通点を見出すことができる。とくに、トーテムシンボルは先祖から伝承してきた部族や家系のシンボルでもあることから、日本の家紋との類似性も取り上げることが可能である。

また、トーテムシンボルには、それぞれに神話的な意味も込められている。この神話の世界観も児童・生徒にとっては興味深いものとなる。これらの神話や生活用具等から得られる生活観を感じ、現地の人々に「思いを馳せながらつくる」ことで、ものづくり教材がより高い学習効果を与えるものとなる。トーテムシンボルに込められた神話的な物語の一例を以下に示す。

〈ワタリガラス〉

この世のはじまりは、昼も夜もない真っ暗な世界だった。世界の創造主であるワタリガラスは、ある精霊の族長とその娘が箱の中に月と星と太陽を大切にしまいこんで

いるのだと聞く。そこでワタリガラスは、赤ん坊に化けて精霊の家に入り込んだ。精霊の孫として迎えられたワタリガラスは、ただをこねて月と星をおもちゃにもらうと家の煙出しの穴から放り投げてしまった。そして、また大声で泣き始める。「太陽が入っているその箱がほしい」と泣き止まない孫に困り果てた精霊は、とうとう太陽の箱を赤ん坊に渡してしまった。ワタリガラスは、しばらくその箱で遊んでいたが、もとの姿に戻ると箱の中の太陽をくわえ、精霊たちの家から逃げ去った。こうしてワタリガラスのおかげで、空に太陽が生まれ、世界は明るくなった。(月刊「たくさんのふしぎ」通巻257号「トーテムポール」2006：22-23)

3 ワークショップにて製作するモノ

ワークショップでの製作には、実物のトーテムポールの材料でもあるレッドシダーの板材を準備した。レッドシダーは、日本では米杉と呼ばれ、近年、世界中に出回るようになった針葉樹である。これを活用し、食料箱のミニチュアを仕上げた。参考とした食料箱は、側面にトーテムシンボルが平面的に描かれ、模倣しやすいと考えられたみんぱくの所蔵物を用いた。食料箱を活用し、中に入れるものを想像するなかで彼らの生活文化にふれることもできる。参加者は、木箱の組み立てとともに側面に模倣・創作したトーテムシンボルを描き完成させることとした。

ミニチュアの大きさは、実物 (W 480mm×D 390mm×H 600mm、蓋はt 100mmの一枚板) を参考とし、約1/4のスケールとした。(W 140mm×D 140mm×H 180mm) (写真2)。



写真2 参考とした食料箱

○木材加工

レッドシダー (板材) 接着剤
げんのう 紙やすり 釘
両面テープを貼り付けた棒材 (バルサ)

○描画

水性塗料 (黒・赤)
水を入れた紙コップ パレット用紙コップ
小筆 月の型紙 鉛筆 新聞紙
ティッシュ
月を描くための型紙

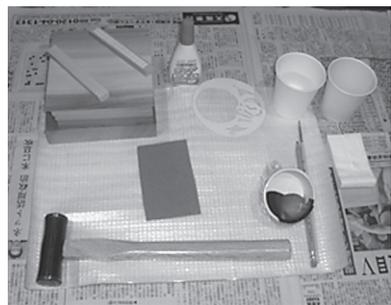


写真3 ワークショップでの準備物

4 ワークショップの実際

(1) 岸上伸啓による解説

ワークショップでは、はじめにカナダ北西海岸先住民に関する基本的な内容について専門家である岸上伸啓により、環境・歴史・文化についての文化人類学的な視点による解説が行われ知識を得た。

主な内容としては、カナダ北西海岸先住民は、いくつかの部族により構成される総称であることやカナダの先住民人口約117万人のうち、約70万人が北西海岸先住民であること。そして、自然環境が豊かな森林資源と水産資源を有し、多雨で温暖な気候であること。また、部族ごとの特徴や儀礼から見た歴史や生活文化、伝統文化の継承等についても詳しく語られた。さらに、人種としては日本人と同じモンゴリアンであることにもふれられ、日本人との共通性が感じられる内容であり、国際理解教育を扱う題材のひとつになる可能性を感じることができた。

(2) 小学校・中学校での実践報告

ワークショップよりも先に小・中学校にて事前実践を実施しておき、参加者に学校現場で実際にどのように本教材を扱ったのかを具体的に示した。

〈主な実践内容〉

はじめに、小学校での授業の導入として、道徳の時間を活用し、カナダの地理や同化政策を含めた多民族国家としての歴史を知ると同時に北西海岸先住民の実物のモノを提示し、実際にふれて感じる授業を行った。「実際のモノにふれて感じる」ハンズ・オンは、児童にとって、より人々の生活が近く感じられるものであり、児童の理解をより具体化するものである。

その後、図書室の絵本を読み聞かせたり、トーテムシンボルの神話的な物語を聞かせたりしながら、自然観について学びを深めた。さらに、「みんぱっく～極北に生きる～」を活用し、イヌイットの生活文化にふれ、カナダの先住民文化についての理解を深めた。この時点ですでに「もっと知りたい・作りたい!」「カナダに行って本物を見たい」という児童の気持ちは十分に高まっていて、現地の人々に思いを馳せながらつくるといった感覚に近づいての製作となった。その後の図画工作科での製作では、まずは実物を参考とした模写を行い、デザインの仕組みを理解した上で、木箱に描く下がきの創作活動を行った(写真4)。



写真4 児童が創作したシンボル（左：サーモン 右：月）

ついで、事前に寸法どおりに切断しておいたレッドシダーの板材を組み立て、実物を参考にして自分なりに創作したトーテムシンボルを水性ペンキで描いた（写真5）。

中学校では、美術科においてトーテムシンボルのデザインを描き、技術科において木材加工を行う教科間の連携で授業を進めた。製作では、板材は切断から蓋の側面をかなで斜めに削る作業まで生徒自身が行い、小・中学校それぞれの発達段階に応じた実践とした。

木箱が完成した後の小学校での鑑賞会で、児童から出された意見の中に「私の家の前に飾る提灯箱と似ている」というものがあった。指導者側も提灯箱と製作する木箱との共通性を提示するつもりであったが、児童が住む地域では、ちょうど祭りが行われていた時でもあり、家の前に飾っている提灯を入れる家紋が入った木箱と酷似しているという意見が自然と児童から出てきた。形だけでなく、先祖代々へと受け継がれている紋章であることも自分たちと似ているということを見出し出した（写真6）。

また、トーテムシンボルの意味や生活文化などについて各自で詳しく調べたなかで、幸せになるためにモノに願いを込めるという風習は日本にもあるという共通性や、自分たちとは違った生活の仕方があるという差異性についても見出すことができた。



写真5 シンボルを描く児童



写真6 家紋が描かれた提灯

〈小学生の作品例〉



写真7 小学生の作品①



写真8 小学生の作品②

〈中学生の作品例〉



写真9 中学生の作品①



写真10 中学生の作品②

〈児童・生徒の感想〉

- 木の香りが独特だ。木を蒸して曲げるなんてすごいと思った。
- 同化政策は良くないことだ。生活の仕方が違ってても、なかよくわかりあうことが大切だ。
- 七福神や信楽焼の狸など、幸せになるためにモノに願いをこめるのは自分たちと似ている。
- 提灯箱は、家紋を先祖代々に伝えるという意味では、とくに似ている。
- 決められたパーツの組み合わせでトータルシンボルがデザインされることにすごいと思った。数個のパーツしかないのに、かえって美しいデザインができることが不思議だった。

(3) 参加者による製作

会場には、みんぱくが所蔵する本物の食料箱と油脂箱の実物、そして、事前に作成しておいたミニチュアの木箱を展示しておいた(写真11)。参加者は、実物を実際に見て、知識を得た後でもあり、とても興味深く見入っていた。

製作では、まずはじめにレッドシダーの板材の組み立てを行った。板材は、小学校と



写真11 食料箱 (左) 油脂箱 (中) ミニチュア (右)



写真12 組み立てる参加者



写真13 鉛筆で型紙をなぞる



写真14 着色する

同じく事前に切断しておいたものを使用した。その後、接着剤を塗り、釘で組み立てていった (写真12)。

実物の食料箱は、板材を蒸すことにより直角に曲げているため、側面の接合部は一箇所しかない。その事実を知った参加者は、今一度、実物を見直すとともにカナダ北西海岸先住民に対する技術力の高さに驚いていた。また、レッドシダーには独特の香りがあり、ここからも現地が思い浮かぶという意見もあった。

組み立てが完了し、紙やすりでの仕上げを終えた後、トーテムシボルの模倣に進んだ。参加者には、事前に準備しておいた「月」の型紙を配布し、鉛筆でうすくなぞっての下がきとしたが、これをベースに各自でアレンジしたものを描いてもよいことを付け加えた (写真13)。同時にトーテムシンボルとしての「月」は、落ち着きのシンボルであり、夜やすべてのものの守護者であること、そして、月は遠くからいつも人々を見守り、幸福へと導くと信じられているという解説も付け加えた。

平面作品では、円の中にデザインされるものも多く、月は円を基本としているため気付かないが、サーモンやレイブンなど、さまざまな作品が円の中に描かれる。これらの手法も児童にとっては、新鮮な発想であり、デザインの学習としてもイメージ力を育てることに対する効果が得られる可能性を秘めていることも同時に話した。



写真15 側面の文様を仕上げる



写真16 完成作品

次に、水性塗料を用いて模倣・創作したトーテムシンボルを着色した(写真14)。使用した塗料は、黒と赤であるが、これらの色使いは部族ごとにより違い、他にも緑や黄、青、白なども使われる。そのため、作品を見れば、部族もある程度わかるということになる。このような話も付け加えながら作業を進めた。側面には、実物に描かれている文様を基本として描いたが、参加者はそれぞれの思いにまかせて自分なりの文様を描いていた(写真15)。

完成作品(写真16)を並べて、鑑賞し合っているなかで参加者から下記のような感想が述べられた。

(4) 参加者の感想

- モチーフが身近であることから、児童が親しみを持って学習に取り組めると思う。
- 木箱をつくとすれば準備も含めて大変なので、平面作品にするなど工夫して取り組んでみようと思った。
- カナダ北西海岸先住民の芸術としてトーテムシンボルだけを知っていたが、生活用具の中までトーテムシンボルが描かれているとは知らなかった。参加している自分が大変興味を抱いたので、子どもたちも関心をもって取り組むだろうと思った。

5 おわりに

ファーストネーションズの作品はモチーフが身近なものであるため、児童の創作意欲がより高まるとともに、アイデアを出しやすくする効果があると考えられる。また、トーテムシンボルの意味を考えるなかで、カナダ北西海岸先住民の自然観にふれることができる。それらをふまえてものづくりをすることで、ハンズ・オンと同様の実物感を味わい、児童・生徒の意識がより現地の人々に近づくと考えられる。これまでの世界を調べることに始終しがちであった小・中学校での国際理解教育に、ものづくりを通じて異文

化理解を深めるといった、新たな手法として位置付くようさらに追求していきたい。それは、図画工作科・美術科・技術科に国際理解教育を加味することにもなり、他教科との関連も視野に入れた教材としての可能性を示すものであると考えている。

文 献

二川英一

2006 「トーテムポール」『月刊たくさんのふしぎ』257, 二川英一絵, 東京:福音館書店。

コメント

岸上 伸啓

(国立民族学博物館)

経済的なグローバル化が急速に拡大する中で、世界各地で文化・社会現象の同質化とともに文化の混交、伝統の復活や強化など多様な現象が同時進行している。これまで異国の文化は遠くに存在するものであったが、20世紀以降の輸送技術と通信技術の発展によって我々も身近なところで異文化に接触することが多くなった。日本国内においても多文化状況が広まりつつあり、とくに大都市では街角で外国人の姿や外国料理のレストランを見かけることは当たり前の風景となった。

ほぼすべての人間や人間集団はきわめて自己中心的な見方を持っているため、異なる人びととの共生の実現は考える以上に難しく、慣習や考え方の違いに由来するトラブルや誤解、偏見が日常生活の中でもしばしば発生する。多文化状況が進む現代世界では、多文化共生社会の実現は喫緊の課題である。そこで重要になるのは、初等中等教育での適切な異文化理解教育の実施である。

異文化教育の基盤は、この世界には異なる考え方や価値観、宗教、行動規範を持つ人びとがおり、それらの考え方などは、ある地域社会において歴史的に形成されたものであり、決して間違っただのもでも劣ったものでもないという考え方にあると思う。このような思想は「文化相対主義」と呼ばれている。多様な人間がともに生きていくためには、考え方の多様性や違いを理解し、認め合ったうえで、共生のあり方を探ることが必要である。

今回のワークショップでは、異文化理解教育の教材としてカナダ北西海岸先住民の食料箱が取り上げられた。それを作った人びとの歴史と文化、食料箱の素材や作り方、食料箱の上に描かれた図像等を学んだ後で、実際に木箱を自ら作り、その上に図像を模倣して描くというものである。これはきわめて興味深い実践である。北西海岸先住民はサケやビーバーを特異な特徴と表現形式で描き出さ出している。描かれた図像は、日本人が思い描くサケやビーバーとは明らかに異なっている。この違った図像を自ら模倣することによって、図像の背後にある見方の違いを認識するとともに、共通性にも気づくかもしれない。工作や図画など自らの体験を通して文化の違いを学ぶことは、座学では学び得ない、気づきによる多くの発見があると考えられる。

今回の事例のようなアート製作のみならず、さまざまな音楽やダンス、料理などの体験から、異文化の違いと共通性を考えるための教材と教育法の開発に取り組んでもらいたい。